

東南アジアのコーヒー加工輸出業者

—インドネシア・ベトナム・シンガポール—

村 田 武

はじめに

近年では、わが国の農産物一次産品の輸入が世界貿易に占める割合は大きく、とりわけ東南アジア発展途上国で生産される農産物、例えば天然ゴム、コーヒー豆などについては、日本市場の動向が生産国の当該産業にきわめて大きな影響を及ぼすようになってきている。

周知のように農産物分野の一次産品の大部分は、その貿易を米国や欧州の穀物メジャーや加工食品大企業など多国籍アグリビジネスに押えられており、日本市場に関してはこれにわが国総合商社が加わる。さらに、多くの一次産品は途上国の重要な外貨獲得源、したがって経済成長の基礎的条件として期待されたこともあって、国際商品協定によって価格の安定をめざす国際行動の対象にもなってきた。ところが、ほとんどの国際商品協定が、1990年代に入って、国際価格を安定させるための直接的な経済条項（輸出クォータや緩衝在庫に代表される）を失うとともに、代ってその貿易や加工において独占的支配を強める多国籍アグリビジネスの求める自由貿易主義が強まってきた。このような一次産品の国際貿易をめぐる変化の歴史的意味を明らかにすることが課題になっているといえよう。

そしてすでに、別稿でも述べたように、一次産品問題についてはアジアのそれについて、生産段階では小農民やエステート、加工流通段階では仲買人や農協、加工輸出業者（シッパー）、さらに政府の政策などを、悲観的な評価のもとにある国際商品協定や欧米・日本の多国籍アグリビジネス、さらに商品先物市場などとの関連性のもとに、それをわが国を重要な市場とする産品について現代の特徴を明らかにしていくことは、途上国農村経済の発展と小農民を中心とする農村住民の所得向上の道筋を解明し、この分野でのわが国の国際貢献策をさぐるうえで積極的な意味をもつのではないか。¹⁾

小論は、東南アジアの輸出農産物のなかでも重要な位置を占め、かつ日本市場に大きく依存するコーヒー豆をとりあげ、主に加工輸出業者（シッパー）の実態を見る。ここで紹介するのは世界第3位の生産量をもつアジア最大の生産国インドネシア、急激に生産を伸ばしタイを追抜いたベトナム、それにこれら東南アジア産コーヒー豆の中継貿易港であるシンガポールの加工輸出企業である。²⁾

I インドネシアのコーヒー加工輸出業者

1 インドネシアのコーヒー輸出と流通機構

インドネシアは100万 ha のコーヒー園をもち、1991年の生産量が42.2万トンに達する世界第3位のコーヒー生産国である。生産されるコーヒーの大部分39.6万トン（93.8%）がロブスタ種³⁾であって、アラビカ種は2.6万トンにすぎない。インドネシアはロブスタについてはコートジボアールやザイール、ウガンダ、カメルーンなどアフリカのロブスタ生産諸国を凌駕する世界最大の生産国であり、輸出国である（表-1）。ロブスタの主産地である南部スマトラのコーヒー・トライアングルと呼ばれるランボン、南スマトラ、ベンクールの3省は世界最大級のロブスタ産地といってよい。近年ではアフリカのロブスタ生産国での政治経済の混乱がコーヒー栽培にも悪影響を与え、コーヒー園の更新の遅れにともなう生産量や品質の低下、船積み不安定などの問題を抱えているのに対し、アジアではこのインドネシアを中心に、品質向上と輸出量の安定性など国際市場での評価を高めている⁴⁾。

インドネシア産コーヒーは国内消費約9万トンを除いて輸出されるが、1991年には前年までの繰越在庫を含めて38.2万トン（3.76億ドル）の輸出である。1970年代半ばに10万トン台に達した輸出量（表-2）は、70年代後半には20万トン台へ、80年代末には30万トン台から40万トンのレベルに大きく伸びている。インドネシアにおけるコーヒー生産が70年代半ば以降たいへんな勢いで

表-2 インドネシアのコーヒー豆輸出量（1971～90年）

	量（トン）	金額（千ドル）
1971	74,200	55,385
1972	95,600	72,440
1973	99,700	77,445
1974	114,100	101,341
1975	128,381	99,804
1976	136,272	237,517
1977	160,359	599,253
1978	215,864	491,111
1979	229,192	614,236
1980	238,677	656,003
1981	209,695	345,942
1982	226,940	314,619
1983	241,223	427,211
1984	294,463	565,241
1985	282,671	556,203
1986	298,124	818,389
1987	286,316	535,566
1988	298,998	530,237
1989	357,902	490,406
1990	442,181	377,201

（出所）CIC（Capricorn Indonesian Consult）資料（原資料は1971～74年についてはインドネシア銀行、1975～90年については中央統計局）

表-1 世界の主要ロブスタコーヒー輸出国（輸出量）
(t)

	1980	1985	1987
アフリカ			
アンゴラ	47,500	18,600	16,140
カメルーン	93,000	96,600	84,480
中央アフリカ	11,400	19,000	11,520
コンゴ	2,100	2,500	480
コートジボアール	216,000	280,000	168,780
ガボン	600	2,200	780
マダガスカル	65,100	44,000	48,300
ウガンダ	108,000	151,000	13,020
トーゴ	9,000	13,500	13,020
ザイール	59,000	70,000	103,440
（アフリカ 合計）	（611,700）	（697,400）	（596,880）
アジア			
インドネシア	217,000	273,000	272,640
フィリピン	16,000	31,200	16,260
スリランカ	900	5000	748
タイ	2,100	20,500	22,680
（アジア 合計）	（236,000）	（329,700）	（312,300）

（出所）René Coste, Coffee, the Plant and the Product, 1992, p. 262.

拡大したさまが見て取れよう。

表-3 東南アジアのコーヒー輸出3国の
仕向地別輸出量 (t)

	インドネシア (1991年)	タイ (1992年)	ベトナム (1991年)
日本	69,313	8,068	517
韓国	12,516	7,202	—
シンガポール	19,674	6,695	53,073
オーストラリア	1,352	752	—
イギリス	13,331	5,273	288
ドイツ	93,219	4,543	1,228
オランダ	11,186	600	341
イタリア	10,293	469	600
ハンガリー	12,737	267	—
ポーランド	18,856	5,550	—
アメリカ	23,708	28,203	—
アルジェリア	51,538	—	2,500
フランス	809	37	3,252
オーストリア	1,325	—	7,500
旧ソ連	—	—	966
ブルガリア	100	—	451
ユーゴスラヴィア	700	—	705
スイス	1,031	—	1,100
香港	886	—	1,588
中国	954	—	800
インドネシア	—	—	1,200
タイ	20	—	150
その他	38,555	2,014	530
合計	382,103	69,665	76,889

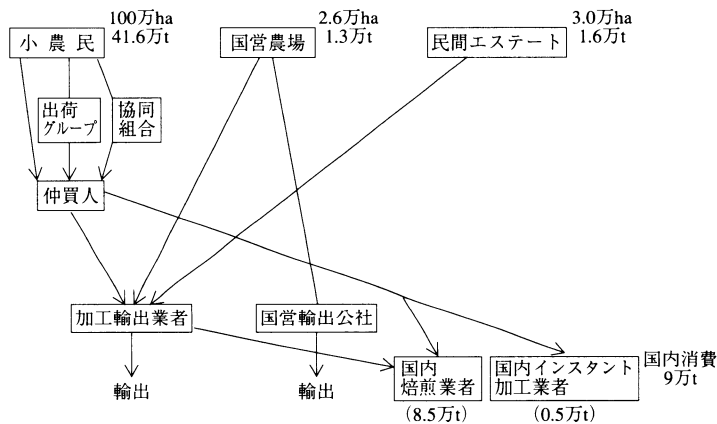
(出所) (財)新農政研究所『商品先物取引研究・南北貿易におけるコーヒー—豆—日本の国際貢献策を求めて—(中間報告)』, 1993年9月, 69ページ。

表-3で輸出先を見ると、ドイツ、日本を含むアジア、東欧、アルジェリアが目立つ。近年の輸出はドイツ、日本向けが増加し、インドネシアコーヒーにとって伝統的な大輸出市場であった米国が80年代半ばの3分の1にまで落ちている。ドイツ向け輸出の伸びは、ハンブルクを中継港とする東欧への輸出がドイツ向け輸出として増加したことによる。日本については、インスタントコーヒーの伸びによるところが大きく、一国としてはインドネシアにとって最大の輸出市場である。米国への輸出減は、米国内での需要がアラビカ指向を強めたことと、ブラジルのロブスタ生産が拡大し輸送コストの面でインドネシア産ロブスタよりずっと優位に立ったことによっている。韓国、イギリス（旧宗主国としてウガンダのロブスタを輸入していた）への輸出はこれら両国の最大のインスタントコーヒーメ

ーカーであるネスル社がインドネシア産を原料として調達しはじめたことによっている。シンガポールへの輸出は、シンガポールの輸出業者による加工再輸出が中心である。⁵⁾

インドネシアのコーヒーの生産から加工輸出にいたる流通機構は図-1のとおりである。

図-1 インドネシアのコーヒー流通



インドネシアのコーヒー栽培は主として小農民（smallholders）によるものであって、1990年の全国のコーヒー栽培面積105.6万 ha のうちの100.0万 ha（94.7%）は彼らの経営になる。生産量

では小農民は同年の全国生産量44.5万トンのうち41.6万トン（93.5%）を占める。小農民以外では民間エステートが3.0万 ha（2.8%）、1.6万トン（3.6%）、国営農場（コーヒー国営農場は5農場ある）が2.6万 ha（2.5%）、1.3万トン（2.9%）である。地域的には南部スマトラ3省のロブスタ産地に45.3万 ha、北部スマトラ（アチエ、北スマトラの2省）のアラビカ産地（マンデリン・アチエアラビカやガヨマウンテンなどの産地ブランドが著名）に12.7万 ha など合計51.8万 ha と、全国のコーヒー栽培面積の半分はスマトラにある。スマトラ以外では、ジャワ島に14.6万 ha（東ジャワにロブスタ種を主とする国営農場4農場が集中している）、バリ島からチモール島にいたる小スンダ列島に13.7万 ha、スラウェシ島に8.3万 ha（カロシ、トラジャなどの高級アラビカで有名）がある。

小農民が生産したコーヒー豆は通常、パーチメントコーヒー（採取したコーヒーチェリーを天日乾燥させ、外皮を取り除いた状態のコーヒー豆）の状態、庭先か定期市で仲買人に売られる。その際、小農民が個々に仲買人に売る方式だけでなく、農家グループによる共同販売、さらには村落協同組合による共販もある⁶⁾。仲買人は集荷したパーチメントコーヒーを再乾燥と脱穀（ハリングマシンにかけてシルバースキン等の内皮を取り除く）によってグリーンコーヒーにして、輸出港に精選加工工場をもつ輸出業者に売る。工場への運搬は仲買人が行なう。民間エステートはその多くが輸出業者の直営農園と見られる。国営農場のコーヒー豆は国営輸出公社を通じて輸出されてきたが、近年ではほとんどが民間輸出業者を通じて輸出されるようになっている。約9万トンと推計されている国内消費向けのコーヒー（8.5万トンがレギュラーコーヒー、5,000トンがインスタントコーヒー）は、仲買人ないし輸出業者から国内焙煎業者、国内インスタント加工業者に売られる。

2 加工輸出業者

(1) 輸出業者協会

インドネシアのコーヒー加工輸出業者は、1979年に商業省の指導のもとにインドネシア・コーヒー輸出業者協会（ASOSIASI EKSPORTIR KOPI INDONESIA, AEKI）を結成し、主要生産13省に地方支部を組織している。その主たる業務としては、国際コーヒー協定（ICA）にもとづく輸出クォータ制をインドネシアが遵守し、輸出業者に配分されたクォータの管理を行なうとともに、そのもとのインドネシアコーヒーの品質基準の確定や管理、さらに品質向上のための小農民生産者に対する技術普及などを行ってきた。

コーヒーの国際市場において、インドネシア産コーヒーの最大の問題はその品質の不安定さであった。というのは、小農民生産が主流をなすインドネシアでは、小農民による収穫から乾燥によるパーチメントコーヒーへの農家庭先での一次加工段階で発酵臭、カビ臭、異臭が付着することが少なくないこと、さらに選別の不十分さによる欠点豆や異物（土、小石、小枝など）の混入が甚だしく国際市場でのインドネシア産コーヒーの評価を著しく損なっていたからである。商業省の指導のもとに1978年に初めて輸出向け品質規格制度が導入されている。それは300 g のサンプルの豆の中に欠点豆が何粒入っているかで格付けする方式であった。この品質規格制度はAEKIが組織されて以降改善され、現行の規格基準（ディフェクト制）は1983年に設定され、さらにグレード区分を一部精密にしたものである。コーヒー豆の欠点の型（Type of Defects）とそれぞれの欠点値（Value of Defects）は表-4(1)のとおりであり、サンプル300 g 中の欠点値合計を基準にして、表-4(2)のようなグレード区分がなされ、輸出されるコーヒー豆はこれにもとづい

表-4 インドネシアの輸出コーヒー品質基準

(1) コーヒー豆の欠点の型 (Type of Defects) と欠点値 (Value of Defects)

番号	欠点の型	欠点値
01.	1 black bean (黒い豆1個)	1
02.	2 partly black beans (部分的に黒い豆2個)	1
03.	2 broken black beans (崩れた黒い豆2個)	1
04.	1 husk bean (外皮付き豆1個)	1
05.	4 brown beans (褐色豆4個)	1
06.	1 large husk fragment (大きな外皮のかけら1個)	1
07.	2 medium husk fragments (中ぐらいの外皮のかけら2個)	1
08.	5 small husk fragments (小さな外皮のかけら5個)	1
09.	10 beans in silverskin (for robusta coffee, wet processed) (シルバースキン付き豆10個, 水洗式ロブスタ)	1
10.	2 beans in parchment (パーチメント付き豆2個)	1
11.	2 large parchment fragments (大きなパーチメントのかけら2個)	1
12.	5 medium parchmet fragments (中ぐらいのパーチメントのかけら5個)	1
13.	10 small parchment fragments (小さなパーチメント10個)	1
14.	5 broken beans (崩れ豆5個)	1
15.	5 immature beans (未熟豆5個)	1
16.	10 beans with one hole (穴あき豆10個)	1
17.	5 beans more than one hole (1個以上の穴のあいた豆5個)	1
18.	10 spotted beans (for wet processed) (傷つき豆10個, 水洗式)	1
19.	1 large stick, piece of hard earth or stone (大きな枝, 固い土ないし石の大きなかけら1個)	5
20.	1 medium stick, piece of hard earth or stone (中ぐらいの枝, 固い土ないし石の中ぐらいのかけら1個)	2
21.	1 small stick, piece of hard earth or stone (小枝, 固い土ないし石の小さなかけら1個)	1

表-4

(2) ディフェクト制によるグレード区分

グレード	欠点値合計の基準
1	最大11
2	12~ 25
3	26~ 44
4 a	45~ 60
4 b	61~ 80
5	81~150
6	151~225

注) 1. 貿易省標準化品質管理局・品質検査管理局が監督
 2. 1983年10月1日に始めて実施された際には、グレード4 a, 4 bはひとつのグレードであった。

て6段階にグレーディングされている(中級の標準品であるグレード4が4 a, 4 bに細分されているのを考慮すれば7段階)。グレード6の基準に合格しない豆は輸出が許可されないの、国内向けとなる。インドネシア・ロブスターコーヒーの最大の輸出港であるランポン港から輸出されたコーヒーのグレード別輸出量は表-5のとおりである(原表ではグレード4が4 a, 4 bに細分されていない)。標準品であるグレード4が輸出量の70%台に達したのは、基本的には近年のインドネシア産ロブスタコーヒーの品質管理が改善されてきたことをしめしている。ただし、1992, 93年に最低品質のグレード6の輸出量がそれ以前より大きく減った背景には、品質改善だけでなく、アフリカ産ロブスタの減産のもとで欧州市場でのインドネシア産グレード4の需要が高まったという事情をも反映しているという。ちなみにネスル社やAGF社がインスタントコーヒー原料として買っているのが大部分グレード4である。

このディフェクト制はロブスタ、アラビカ共通の規格基準であるが、これに水洗式精製法(ウェット・プロセス)、非水洗式(ドライ・プロセス、天日乾燥)精製法別(アラビカは産地品種によって水洗か非水洗精製かがほぼ決まっている)、さらに非水洗式がほとんどであるロブスタについては、最終加工工程で機械や手で磨き上げる作業を加えた豆(AP-1, アフターポリッシュ)とそうした作業を加えていない豆(EK-1, ノンポリッシュ)という区分が組み合わせられる⁷⁾。

ロブスタの水洗式精製品(WIB-1, WIB-2)は東ジャワの国营農園と民間輸出業者の直営エス

表-5 ランボン省のコーヒー輸出（グレード別）

歴年	価額 (1,000ドル)	グレード別輸出量						
		量(トン)	グレード1	グレード2	グレード3	グレード4	グレード5	グレード6
1988	214,301	117,788 (100%)	900 (0%)	1,100 (1%)	2,352 (2%)	78,148 (67%)	9,401 (8%)	25,878 (22%)
1989	199,510	148,871 (100%)	1,488 (1%)	2,977 (2%)	2,977 (2%)	105,701 (71%)	5,954 (4%)	29,774 (20%)
1990	165,490	191,398 (100%)	1,924 (1%)	5,774 (3%)	3,464 (1.8%)	122,111 (64%)	11,933 (6.2%)	46,192 (24%)
1991	175,599	204,185 (100%)	4,883 (2%)	4,883 (2%)	5,104 (2.5%)	143,377 (71%)	3,062 (1.5%)	42,876 (21%)
1992	100,671	122,671 (100%)	2,645 (2%)	2,661 (2%)	3,925 (3%)	93,521 (76%)	4,715 (4%)	15,204 (13%)
1993	112,329	130,255 (100%)	150 (1.1%)	3,595 (2.7%)	6,850 (5.2%)	93,899 (72%)	6,625 (5%)	19,136 (14%)

(注) 1993年については8月までの数値である。

(出所) ランボン省資料。

テートで一貫生産され品質的に問題の少ないもので、グレードは1, 2に評価される。ロブスタの大部分を占める非水洗式精製品のうち、AP-1は精製にさらに手が加えられた分、歩留りが下がり、香りも落ちるが、風味が良くなり価格が高くなるとともに、欠点豆や異物の混入も減ってグレードは2から4が中心になる。缶コーヒーの原料豆にこのAP-1が主に使われるので、AP-1の輸出先は日本が中心となる。インスタントコーヒーの原料は通常のEK-1が使われる。グレードが5, 6といった下級品は大部分がロブスタのEK-1ということになる。

アラビカのうち北スマトラ産のマンドリンは非水洗式精製でグレード3, 4が中心、ジャワ、カロシ、トラジャなど水洗式アラビカはグレード1, 2が中心になる。

さて、国際コーヒー協定による輸出クォータが実施されていた時期にはおよそ300社程度であった輸出業者は、1989年7月に輸出クォータ制が停止され、それに対応してインドネシア政府が規制を緩和したことにもなって、協会への登録業者数は1,000社にも増えた。これは、インドネシア国内でのクォータの輸出業者への配分が輸出実績をもとに行なわれてきたという事情が前提にあって、既存業者がいずれ新ICA協議がまとまり輸出クォータ制が復活するだろうと予測し、新たな配分枠の獲得を狙って、1社当たり4, 5社もこの間に別会社を設立したことによるものである。ところが、それ以降、国際価格の急落にもなってそれら別会社の多くは営業を停止してしまっており、1993年に営業している業者はおよそ350社程度ということである。

輸出業者の多く、とくに大手業者は大部分が華僑系である。インドネシアのコーヒー豆輸出業務は、その決定的部分が華僑資本に握られているといえる。以下は、ロブスタコーヒーの代表的輸出港であるランボンとパレンバン、および古くからのアラビカコーヒー産地である北部スマトラを後背地にもつメダンの輸出業者協会支部、さらにトップクラスの輸出業者であるプラシダ・グループの精製加工工場の調査にもとづくものである。

(2) 南部スマトラのロブスタ産地の輸出業者

AEKIランボン省支部には、ランボンでコーヒーの精製加工・輸出業務を行なう286社が加盟している。インドネシアのコーヒー輸出量に占めるランボン港からの輸出が表-6に見られるようにたいへん大きいために、輸出業者の数も多い。これはランボン港からは同省内産のコーヒー豆だけでなく、輸出港をもたないベンクール省産の大部分、さらに南スマトラ省産の一部も輸出されるからである。ただし、90年代に入って国際価格が大きく下落して以降は、実際に営業中の

表-6 ランボンからのコーヒー豆輸出額の全国輸出に占める割合

	ランボン輸出額 (1,000ドル)	全国輸出額 (1,000ドル)	比率(%)
1983	135,507	211,835	63.96
1988	214,301	409,640	52.87
1989	200,053	393,200	50.87
1990	189,020	376,800	50.16
1991	181,226	373,190	48.55
1992	100,671	303,940	33.12

（出所）ランボン省資料。

会社はわずか20社程度に限られるという。後に紹介するプラシダ・グループ傘下のアネカ・スンベル・ケンカナ社をトップに、販売量が年間1万トンを超えるのは7社、その他はいずれも1万トン以下である。

南スマトラ省都パレンバンには現在110社の輸出業者がある。この3年間に新規に設立されたのは14社である。取引高規模では4万トンを超えるアネカ・ブミ・アシー社（プラシダ・グループ）が飛び抜けた存在で、8,000トンから1万トンが2ないし3社、5,000～8,000トンが2ないし3社、3,000～5,000トンが2ないし3社であって、他は3,000トン未満の小規模業者が多数である。このなかにはジャカルタに本社がある会社があり、各社は集荷および輸出でグループを編成している。パレンバン港は外洋からムシ川を7時間遡った良港（外洋船入港可能）であって、南スマトラ省内産のコーヒーだけでなく、港湾に恵まれないベンクル省産のものも多くがこの港から輸出される。CV. スレックス社（取引高7,000トンでパレンバンの業者としては大手）のように、アメリカおよび欧州の焙煎業者と代理店契約を結び、安定した輸出業務を行なっている事例があり、パレンバンの輸出業者の経営戦略は多様なようだ。

南スマトラ省のコーヒー産地はパレンバンから南西に300 km離れたラハト、ムアラエニム、バツラジャなど遠隔地にあり、すべてロブスタコーヒーである。生産農家数は現在17万3,600戸を数える。この省のコーヒー栽培もランボン省と同様に小農民に担われている。生産農民から買い上げられているコーヒー豆は1990年82,600トン、91年81,500トン、92年82,700トンとされているので、ランボン省とほぼ同等の生産量のようである。

AEKI 南スマトラ省支部としては、奥地の標高1,000 mを越える高地がアラビカ栽培適地であるので、新たに輸送インフラ整備を進めさえすれば、アラビカコーヒー産地の開発が可能であるとしている。すでに3ヵ所の開発適地を選定済みであって、開発資金の農民への貸与と技術指導についての政府の協力を求め、具体化に着手することをめざしている。この南スマトラ省支部は全国の輸出業者協会支部のなかでも最も良く組織された最大規模の支部だとされているから、このアラビカ開発計画が進展する可能性もありえよう。

(3) 北スマトラ省のアラビカ旧産地輸出業者

インドネシアのアラビカコーヒーを代表するマンデリンの産地である北スマトラ省の AEKI 北スマトラ省支部（メダン）に加盟している輸出業者は170社を数える。しかし、国際コーヒー価格が底値にはりついた1992年半ば以降にも営業を継続している会社は30社余りにとどまる。1990年6月にコーヒー取引会社設立許可条件が緩和されたことにもなって、ここメダンでも新設された会社が少なくないことになっている。

メダンに本社を置く輸出業者のトップには取引高18,000トンのグヌン・リントン社（PT. GUNUNG LINTONG 社）である。この会社の取引のうちアラビカは10%であって、ランボン省で買って輸出しているロブスタが90%をしめるというから、アラビカ旧産地を後背地にもつ輸出業者も、その業務はロブスタの精製加工を中心にせざるをえないことがわかる。次いで大きい

は取引高5,000トン前後が3社、大部分の輸出業者は1,000トン以下である。なお、メダンにインスタントコーヒー工場を持っているサリ・インドフード社(SARI INDOFOOD CORPORATION)はインドネシアを代表するインスタントコーヒー・ブランド(年産7,000トン)である Indocafe のメーカーである。

メダンから輸出されるアラビカコーヒーは北スマトラ省産と、アチェ省産のものであって、いずれも仲買人によって集荷される。平年作としてはアラビカが北スマトラ省(産地は主にトバ湖周辺のリントン, シリ, シディカラン地区)で8,000トン, アチェ省(主にタケンゴン地区)で1.5万トンの計2.3万トン, ロブスタコーヒーは北スマトラ省で2.0万トン, アチェ省で7,000トンの計2.7万トンであろうが, 1992年, 93年には生産量は半減しているのではないかと見られている⁸⁾。

メダンから輸出されるコーヒーの輸出先は伝統的に日本が中心であった。とくにマンデリンコーヒーは1976年に野村貿易が手掛けて以来, ほとんどが日本向け輸出であった。しかし, ここ1, 2年は生産量の減少で日本市場での競争力が低下し, しだいに日本向け一辺倒ではなく, 東欧や台湾, 米国向けが増えている。米国向けは西海岸のグルメコーヒー向けだという。シンガポールが近いが, シンガポールのトレーダーへの輸出はわずかのようである。

1989年7月の輸出クォータ停止後, コーヒー価格はロブスタでは1kg当たり1.80ドルから80セントに下落し低迷の後, 93年夏以降はやや回復しつつある。しかし, 調査を行なった93年11月ではアラビカは3ドルから1.80ドルに下がったまま, まだ回復力が弱かった。輸出業者にとっては, 国内で仲買人から買い付ける価格とは逆ざやもありえ, 2.40ドル水準までの回復が期待されていた⁹⁾。ただし, そうした価格回復を国際コーヒー協定の輸出クォータ制の復活に期待するといった考えはなく, 復活を望まないというのが, メダンの代表的輸出業者の共通認識であるとみられる。輸出業者としては国際コーヒー協定に規制されるよりも, 当面は利鞘が薄くても, 自由な取引が好ましいということであろう。1980年代に急速に伸びた南部スマトラのコーヒー・トライアングルをバックにしているランボンやパレンバンの輸出業者と比較すると, このメダンの業者は輸出業務に関して歴史的蓄積があり, それだけに自由競争を望む意識が旺盛であるといえよう。

(4) プラシダ・グループ

インドネシアを代表するトップクラスのコーヒー輸出業者がプラシダ・グループ(PRASIDHA GROUP, 株式非上場)である。古くからコーヒー輸出業務を行ってきた華僑系の4社が1984年にグループを編成し, インドネシア・ロブスタコーヒーの主産地であるスマトラ南部に出資してコーヒー豆工場を獲得しながら, 現在ではインドネシアコーヒー輸出業者の大手に成長したものである。商品輸出では, コーヒー以外にもタピオカ, ゴム, スパイス, カカオ豆などを手掛け, さらに自動車部品製造, 不動産部門, ホテル経営(バリ島にホテルを2つ経営)に進出するとともに, 銀行をもグループ内に設立している。1992年にはまぐろ缶詰(シーチキン)会社であるアネカ・ツナ社(PT. ANEKA TUNA)を伊藤忠・はごろも食品と合弁でスラバヤに創業した。

コーヒー部門はジャカルタのグループ本社の統轄のもとに, 計16社の輸出会社を傘下にもつ。これは, このグループもICAの輸出クォータが再び配分されることを予想して, 基本枠獲得を有利にするために輸出会社を増やしたことによっている。16社とも解散せず維持している。ただし, 主力はランボン省に年間5万トンの加工処理能力のある工場をもつアネカ・スンベル・ケンカナ社(PT. ANEKA SUMBER KENCANA), パレンバンに同じく年間5万トンの加工処理能力

のある工場をもつアネカ・ブミ・アシー社（PT. ANEKA BUMI ASIH 社）、スラバヤのアネカ・ブミ・ケンカナ社（PT. ANEKA BUMI KENCANA）で集荷・精製し、ジャカルタのグループ本社の管理のもとに輸出している。1993年度ではランポン、パレンバン（注）の2社で合計9万トンほどの製造となっており、輸出量は9万トンないし10万トンにのぼる。インドネシアのコーヒー輸出総量の4分の1がこのグループの手中にある（なお、スラバヤ工場については、東ジャワ地域では国内ロースターの集荷に押されて、荷が十分には集らないとのことであった）。

プラシダ・グループが大きく成長した背景のひとつに、このグループがアルジェリア向け輸出を独占しているという事情がある。インドネシアからアルジェリアへの輸出量は1990/91年度41,390トン（インドネシアの輸出総量の10.9%で、輸出先第3位）、1991/92年度46,745トン（同17.7%、同第2位）と、きわめて重要な輸出先となっている。これはインドネシア政府とアルジェリア政府の双方に繋がりのあるプラシダ・グループが、アルジェリア輸入公社と契約する事実上の国家貿易的輸出権益を握っていることによっている。なお、このグループの対欧州・日本向け輸出のほとんどは伊藤忠商事との取引によるものである。

アネカ・スンベル・ケンカナ社を見よう。

プラシダ・グループ傘下の代表的コーヒー輸出業者のひとつが、バンドルランポンのアネカ・スンベル・ケンカナ社である。プラシダ・グループ編成1年後の1985年に設立されており、主な加工品目はコーヒー（コーヒー豆の精製加工の最盛期は4～7月であるが、通年、加工作業がある）とタピオカ（同8～11月）であり、これにメイズ（同1～2月）、こしょう、バニラなどが加わる。

この会社はロブスタ産地のランポン省で原料豆を獲得する加工輸出業者であるが、今後の経営戦略のひとつとして、アラビカ直営農園をバンクル省で経営する方針を固め、すでに600 haの土地を取得し準備を進めている。すでに100 haほどは新植も終えているという。

1993年は1月から10月の間に、5万トンを製造した。通年では6万トンの製造規模をもつインドネシア最大級のコーヒー工場である。原料豆はほとんどが仲買人5、6社を通じて買い付けている。生産農家から直接買い入れるというのはごくわずかである。農業協同組合からの買付けもわずかである。買い値は主にロンドン市場を参考にしている。例えば1993年11月16日では、「ロンドン市場を参考にすると、今日グレード4が売れそうな価格は1,110ドル（1トン当たり）である。それをインドネシア・ルピアに換算（1ドルが2,080ルピア）すると1 kg 当たりで2,310ルピア（FOB）である。これを基礎にして、逆ざやではあるがグレード4を1,165ドル/トン（2,423ルピア/kg）までは買っている」という。国内で売ることもある——例えばネッスル・ランポン工場へは輸出向けより高値の1,200ドルで売ったとのこと——し、とりあえず倉庫に入れさせて、値決めは後でということもあるので、買付価格は単純ではない。買い入れるコーヒー豆の品質は、現在の低価格のもとでも良くも悪くもなっていないというのが実情のようである。

従業員は常雇が130人、コーヒー収穫の最盛期である4月から8月には300人ほどの日雇を雇う。工場は、①08時00分—16時00分、②16時00分—24時00分、③24時00分—08時00分の3交代勤務で、食事休憩1時間を除く7時間労働である。このシフトは1週間毎にチェンジする。毎日トラック3、4台で、遠い所は35 kmもあるところを巡回して労働者を集める。出勤率を高めるために、①勤務については朝食と昼食、②勤務は夕食を提供している。工場労働者は年齢が17歳から40歳の人を雇用しており、それほど苦勞せずに集められる。その多くは政府のトランスミグラシ政策

によってジャワ島から移住してきた人々である。ちなみに、ランポン省の人口800万人のうち700万人はジャワ島等からの移住者であって、雇用労働力の確保にはそれほど苦労しない。出勤率はたいへん高く、よく働くとのことである。工場労働者（男子）の賃金はランポン州賃金基準（最低賃金2,500ルピア/日）をもとに、未熟練者で日給3,000ルピアに始まり、熟練者では5,000ルピアである（③の24時00分以降の夜間労働勤務の場合は食事が提供されないで、割増賃金がある）。班長は月給20～30万ルピアである。コーヒー袋縫い作業（交代労働なし。08時00分から16時00分の勤務）には女子労働者40人が雇用されており、日給は2,000～3,500ルピアである。ちなみに1993年末におけるルピアの為替レートは1ルピア6銭でいどであるから、ランポン省最低賃金（日給）2,500ルピアはわずか150円、ランポン省で一般のコーヒー工場労働者で、日給は180円から210円の水準にあることになる。

プラシダ・グループのいまひとつの主力工場であるアネカ・ブミ・アシー社（パレンバン）は、1984年に現在の工場設備（敷地は12 ha）を買い入れている。ゴムとコーヒー豆の精製加工を行っており、ゴムではプラシダ・グループの最主力工場であり、コーヒーではランポン工場より規模はやや小さいものの、年間4万トンの輸出量である。今後これを7万トンまで増やしたいと計画している。そのなかには上に見たアネカ・スンベル・ケンカナ社が進めているアラビカコーヒーの新農園開発計画への参加も含まれる。

コーヒー精製加工部門には350人の労働者を雇用しており、収穫期には3交替制で加工を行っている。工場賃金は男では日給6,000ルピア、女では3,000ルピア（コーヒー袋縫い作業）である。またバージ（斛）コンテナへのコーヒー豆袋（90 kg）の積み込み作業は、1袋当たり150ルピアの出来高賃金である。いずれもランポンよりやや高い水準にある（ランポンの袋積み込み作業賃は50ルピア）。プラシダ・グループとしては、このパレンバンとランポンの賃金格差を背景に、コーヒー精製工場の主力はランポン工場に置く戦略をとっているという。

なお、このパレンバン工場では、AP-1（アフターポリッシュ）よりも価格評価の高い差別化商品として、主として日本向けの“SAKURA”を製品にしていることをひとつの特徴にしている。

Ⅱ ベトナムのコーヒー輸出入公社

1 ドイモイ政策のもとで伸びるコーヒー生産と輸出

かつて旧ソ連や東欧諸国に向っていたベトナムのロブスタコーヒーが、主にシンガポールを経由しながら、国際価格の低迷下で輸出を伸ばしている。輸出量はタイを抜いて10万トンに近づいている。

ベトナムは、1986年以来ドイモイ（刷新）政策を採用し、改革開放と市場経済移行に邁進している。農業分野についても1988年4月に、ベトナム共産党の「農業経済管理の刷新に関する政治局決議第10号」が、①農産物の市場価格での買上げ、②集団経営から家族経営への転換、③農家の土地使用权を15年間とし、安定して経営に励めるようにするなど、従来の農業集団化政策を画期的に転換させ、農業の活性化に成果を上げてきた。翌89年には、米の生産が増加し1,900万トンになり、一転して米輸出国になった（89年の輸出量142万トン）。92年には米の生産量は2,400万

トン、輸出量は190万トン（世界第3位）に達した。作物栽培面積の増加も見られ（1990年の水稲作付面積は3期作合計で596万 ha）、商品作物のなかではとくにコーヒーの栽培面積・生産量が大きく伸びている（1985年4.5万 ha、86年6.6万 ha・1.9万トン、87年9.2万 ha・2.1万トン、88年11.2万 ha・3.1万トン、90年12.3万 ha・6.0万トン）。コーヒー以外に栽培面積が増加しているのは、ゴム（85年18.0万 ha、90年21.6万 ha）、ココナッツやし（同12.7万 ha、20.6万 ha）、茶（同5.1万 ha、5.8万 ha）であり、他方、さとうきび（同14.3万 ha、13.5万 ha）、葉たばこ（同4.3万 ha、2.2万 ha）などは減少している。おそらく、いずれも国際市況を敏感に反映しての変化であろう。

あまり知られていないが、ベトナム経済にとってコーヒーは外貨獲得源としてたいへん重要である。1992年のベトナムの十大輸出商品のうち4品目が農産物であって、コーヒーは米に次ぐ輸出農産物である（コーヒーに次いで、ピーナッツ、果実・農菜）。

さらにドイモイは貿易政策の分野でも、1980年までの外国貿易省直属の輸出入国営公社（1業種1輸出入公社原則）による運営から、80年代前半には地方の輸出入公社の設立、外国貿易省の権限縮小、そして86年以降は輸出入数量規制の緩和、民間企業の輸出入業務の認可が進められてきた¹⁰⁾。

先の表-3に見られたとおり、1991年におけるベトナムのコーヒー輸出量は7.7万トンに達するが、うち5.3万トン（69.0%）はシンガポール向けである。輸出量の3分の2余りは後に見るシンガポールの輸出業者の手で中継されて国際市場に輸出されているところに、輸出入の国営公社方式を改革しはじめて日の浅いベトナムの特徴が現れている。

以下は、コーヒー輸出入公社についてホーチミン市とハノイ市で行なったヒヤリングによっている。各公社の経営はいまだ安定しておらず、今後も相当の曲折が予想されることである。

2 コーヒー輸出入公社

(1) VINACAFE

ハノイに事務所を置くベトナム全国コーヒー輸出入公社（VINACAFE, VIETNAM NATIONAL COFFEE EXPORT-IMPORT CORPORATION）は、ドイモイ政策が推進されているなかであって、複雑な組織である。

ベトナムにはコーヒーに関する団体が2つある。

ひとつは、農業食品工業省の管理下にある公団である VINACAFE UNION である。いまひとつはベトナム・ココア・コーヒー協会である VICOFA（VIETNAM COCOA COFFEE ASSOCIATION）であって、これはココアやコーヒーの輸出業者の業界団体（非政府組織）である。協会の責任者を VINACAFE 会長が兼務している。将来的には、この業界団体をインドネシアの輸出業者協会（AEKI）のような組織に発展させたいとしている。ロンドンの国際コーヒー機関へのベトナムの代表には、農業食品工業省と貿易省の役人が中心に、VICOFA からも参加する。

VINACAFE は、以下の業務を行なっている。

1) コーヒー栽培と加工

2万 ha のコーヒー園を保有している。ベトナムのコーヒー産地は中部のダクラク省を筆頭に、南部のドムナイ省、ラムドン省が中心であって、いずれもロブスタである。北部ではハティン省

にわずかのロブスタ産地があり、さらにソンラ省の高地にアラビカが栽培されている。総面積で12万 ha ほどあるが、面積の増加は抑え、管理の改善に力を入れる方向にあるという。ロブスタ産地も標高が800 m から1,100 m あって、堅くしっかりしたグリーンコーヒーが生産され、選別が改善されれば品質評価は高いものになる。

コーヒー園には選別加工工場を付属させ、輸出用・国内用の両方の加工を行なっている。ホーチミン市郊外にはインスタントコーヒー工場（BIEN HOA COFFEE PLANT, 元フランス企業）も持っている。

政府のコーヒーに対する助成策は、アラビカについては栽培適地である北部高原での特別融資制度による新植助成や新品種苗木導入配分などが行なわれている。ロブスタについては当面これ以上の新植は考えられておらず、土地税引き下げ、輸出税廃止などの奨励措置がとられており、2000年には20万 ha のコーヒー栽培面積、うち6.5万 ha をアラビカとする目標が掲げられている。主産地ダクラク省にコーヒー調査研究所（EAKMAT）を設置して、試験研究が行なわれている。

2) 輸出業務

① VINACAFE（本部ハノイ）、② VINACAFE I（同ハノイ）、③ VINACAFE II（同ニャチャン）、④ MASCOFEX（Materials Supply Company）（同ニャチャン）、⑤ VINACAFE III（本部ホーチミン）、⑥ VINACOFEXIM（本部ホーチミン）の6社が、1987年7月以来、全国林産物輸入輸出公団が担当していた輸出業務を行なうようになった。ハノイのVINACAFEも、全体を管理するだけでなく独自に輸出業務を行なう。

コーヒーの輸出業務がいくつもの会社によって競争的に行なわれているのは、コーヒー産業の発展を目指して輸出入公社制度のリストラクチュアリングが行なわれており、ドイモイ政策のなかで反独占政策が重要な位置を占めていること、さらに民間のコーヒー輸出業者がすでに70社余りも営業していることと関わっている。輸出港はホーチミン港が圧倒的で70%を占める。その他はハイフォン港と、わずかにニャチャン港である。したがって、民間輸出業者も大部分がホーチミンで営業している。

ベトナムのコーヒー輸出においては、科学技術環境省・ベトナム品質計量基準局（VIETNAM QUANTITY MEASUREMENT STANDARD DEPARTMENT）が決定したロブスタコーヒー品質規格が輸出用規格として利用されている（表-7）。ただし、実際の取引においては、輸出業者に義務づけられた規格ではなく指導的基準にとどまっている。インドネシアではグレード6以下のものの輸出を禁止していることとの関わりで、国際的な基準に沿って輸出されるベトナムコーヒーの品質規格化が必要になっていることは認識されており、政府がフォローして検討しているとい

表-7 ベトナムのロブスタコーヒー品質規格

	ロブスター1(R1)	ロブスター2(R2)
Defect(欠点豆)	最大5% (重量比)	最大10% (重量比)
Moisture(乾燥度)	最大13%	最大13%
Admixture(異物)	最大0.5%	最大1.0%
Bean Size(大きさ)	スクリーン16に残るもの80%以上 スクリーン14に残るもの20%以上	スクリーン14に残るもの80%以上 スクリーン12に残るもの20%以上

(出所) VINACAFE 資料。

う。なお、ベトナムのロブスタコーヒーの品質に関しては、産地の中部高原がベトナム戦争において米軍が枯葉剤を濃密に散布した地域であることによる残留農薬問題が危惧される。VINA-CAFE としてもそれが重大な問題であることを十分に認識しており、輸出品については残留基準以下であって、バイヤーからも問題が出されていないとしている。

(2) VINACAFE III と VINACOFEXIM

VINACAFE III はコーヒー豆の買入れは、①ダクラク省にある国営農場3～4農場から買入れるものが半分、②ドムナイ省の多数の仲買人から買入れるものが半分というところである。農家は値動きを見ながら仲買人に売っている。国営農場には精選加工施設があるので、公社は選別された製品を買ひ、そのまま輸出することになる。仲買人から買う荷は、コーヒー豆の粒の大きさが選別されただけのものである。輸出するコーヒー豆の品質は、ベトナムの国内グレードでR2のものが95%以上となり、人件費の安い産地で手作業の精選加工が行なわれており、グレードがきちんと決まっていなかったり、品質が安定していないことが大きな問題である。

産地からの買付けは自由競争であり、多数のシッパーが競争で買付けるので、買付け価格が国際価格を上回る事態も起こる。その過程で荷が集らず、輸出契約の履行ができない（ノンデリバリー）といった失敗もこの公社は昨年経験している。資金量が小さく、200トンといった少量単位でしか輸出できていない。1992年度の独自輸出量は3,000トン（ハノイのVINACAFEとの共同買付・輸出もある）に留まり、輸出先はスイス、オランダ、シンガポールと日本である。量的には日本向けが多い。

国際相場は、取り扱うのが大部分ロブスタで日本以外は欧州を仕向先にしているので、ロンドンを見ているという。ロンドン相場と国内相場を見て輸出価格を設定する。現在の国際価格なら何とかできるという。今後の経営戦略としては、①買付資金の調達量を拡大すること（外国銀行からの借入を目指したい）、②日本市場への直接輸出（現在はネスル社やボルカフェ社などの国際トレーダーが日本向けに買っている）である。「日本市場は大きな市場だが、品質基準やバイヤーの要求がたいへん厳しい」という。50人いたという職員を30人に減らして経営を維持しているが、もともと政府間契約に対するデリバリーの経験等しかなく、トレーダーとしての実績が乏しいだけに経営確立の道は容易でないというのが実態といえよう。

VINACOFEXIMはVINACAFE I～IIIと同列で、完全に独立した公社経営（常雇30人）であるが、精選加工工場2工場を持っているベトナム最大手の輸出業者である。工場は3年前に、ベトナムが国際コーヒー機関に加盟したので輸出が増加し、高品質のコーヒーを輸出するには工場が必要になるだろうと予測のもとに建設されている。ダクラク省とラムドン省のロブスタを買付け、カラーソーターも導入して精選している。92年度には11月から4月までの5ヵ月間操業し、20～30人の従業員で1.4万トンの加工実績である。

輸出量・輸出額は、91年度9,000トン、700万ドル、92年度1.3万トン、900万ドルであった。91年度は1トン当たり780ドル、92年度は同690ドルの低価格であった。93年度は1.3万トンの輸出量で1,300万ドル（1トン当たり1,000ドル）の輸出額を期待している。輸出先では日本が最大で50%を占め、他は欧州向けである。日本への輸出は、規格がきわめて厳重であってむずかしく、欧州のバイヤーを通じての輸出であった。資金を得て輸出数量を拡大しながら、信頼される公社としての成長をめざすという。

(3) INEXIM DAKLAK

ダクラク省投資輸入輸出公社 INEXIM DAKLAK (DAKLAK INVESTMENT IMPORT EXPORT CORPORATION) は、国営公社が1988年に改組され今日の組織になったものである（従業員400人）。

この公社は他の輸出入公社とは異なって、コーヒー輸出業務を行なうだけでなく、コーヒー農園への投資を行なっているところに特徴がある。1986年以来6年事業で総事業費800万ドルの農業基盤整備事業（灌漑施設整備、施肥など）を、主に農民経営に対して行なっているという。ダクラク省には12郡があって、そのすべてにコーヒー農園がある。コーヒー農園総面積は5.5万 ha あり、うち3.2万 ha が農家による経営、2.3万 ha が国営農場である。農民経営の平均規模は2 ha というから、これはインドネシアなどよりは相対的に大型である。国営農場（12農場）は1975年の解放後フランス人プランテーションを接收し、1983年に国営農場として組織されたものであるが、現在では農民への分割を進めており縮小の傾向にある。

ベトナムでのコーヒー栽培の歴史は19世紀末に始まるが、それは北ベトナムでのフランス人の入植であった。ラクダク省では1954年にフランス人がコーヒー栽培を始めており、アラビカ、ロブスタ、サリ（Chary）の3品種が栽培されてきたが、南ベトナムが解放される1975年までにはほとんどがロブスタになっている。1976、77年に50トンのサリが輸出された実績があるが、単価が安く、その後は伐採されている。

ラクダク省のコーヒーの単収は、80年代半ばまでは、国営農場で1 ha 当たり 800 kg、農民経営で1,500 kg であった。国営農場の単収の低さは官僚的管理の結果である。1986年以降の管理システムの改善と国営農場の農場労働者による請負制への分割によって、単収はしだいに上昇してきている。現在の平均は1,300 kg 水準と見られる（ラクダク省の総生産量が7万トンレベルになっている）。農民経営のなかには3トンから4トンもの単収を上げるものもある。農民は販売額の10%（1,300 kg の10%で130 kg 分）を地代として政府に納入する。農民にとっては現在の国際価格水準980ドル/トンでは収益性は相当低くなっているとみられる。農家の生産費の算出は困難であるが、ともかくも92年から93年半ばの低価格水準（最低の落ち込みは92年の1トン当たり670～700ドル）でも、ベトナムのコーヒー農家は生産意欲を失わなかったとみられる。農家はコーヒー収穫に日雇労働を雇用するとともに、コーヒー豆の精選加工を国営農場付属の工場に委託し、同時に工場に雇われて出来高賃金を得ている。平均1ヵ月に40ドル、収穫最盛期には150ドルに達する農民もいる。これが価格低迷下のコーヒー栽培の低収益性を補完しているのである。

こうした状況下で、「ベトナムでは国際価格が93年半ばの水準で安定すれば生産はまだ伸びる可能性が高い」というのが、この公社の見方である。ベトナムロブスタの小農民経営における生産費を1トン当たりほぼ750ドルの線でみてよいのかもしれない。

ダクラク省投資輸入輸出公社のコーヒー豆集買は、①農家に生産資材（肥料など）を提供し、収穫期に現物で返済させる、②事前に買上価格契約をしておき、12月初めに代金支払い、12月中に現物受取り、③現物即金買取りの3つの方法で行なわれている。産地に市場はなく、国営農場に職員を派遣し、330ヵ所の集買所を開き、農民がそこに現物を運んでくる。こうして公社が集買できる量は、省内生産量7万トンのうち1.8万トンであるという。4分の1という率は高いと見るべきであろう。

輸出先はフランス、ドイツが多い。日本向けは丸紅、兼松、ボルカフェ社などと取り引きしている。輸出単位は平均1,000トンである。12月から4月が主な輸出期であって、通年は輸出できない。輸出価格の設定は国内相場とロンドン価格を参考に決めている。ロンドン価格より200～300ドル低い。

Ⅲ 中継貿易港シンガポールの輸出業者

1 シンガポールのコーヒー中継貿易

シンガポールのコーヒー貿易量は、表-8のとおりである。輸入量は82,013トン（9,801万シン

表-8 シンガポールのコーヒー豆¹⁾輸出入（1992年）

輸 入			輸 出		
相手国	量 (t)	額 万Sドル (CIF)	相手国	量 (t)	額 万Sドル (FOB)
タイ	6,949	853	日本	7,641	1,096
フィリピン	226	28	韓国	2,306	303
マレーシア	208	77	ホンコン	52	6
インド	70	8	マレーシア	2,170	480
ビルマ	30	4	台湾	65	13
中国	18	3	ブルネイ	19	4
スリランカ	191	22	その他のアジア	107	14
その他のアジア ²⁾	63,441	7,479	オーストラリア	8,414	1,062
パプア・ニューギニア	808	167	ニュージーランド	2,934	454
その他オセアニア	150	16	アメリカ	31,646	4,440
ブラジル	112	28	カナダ	504	98
コロンビア	1,148	244	チリ	120	23
メキシコ	70	15	ベルギー	175	20
ペルシー	9	4	フランス	424	54
カナダ	102	37	ドイツ	2,852	360
コートジボワール	7,544	546	ギリシャ	2,328	349
エチオピア	218	555	アイルランド	65	23
ケニア	36	15	イタリア	1,212	181
タンザニア	40	10	ノルウェー	50	8
ウガンダ	100	7	ポルトガル	99	18
その他	32	7	スペイン	52	9
			イギリス	568	81
			オランダ	290	48
			ブルガリア	196	15
			ポーランド	1,270	162
			ルーマニア	16	3
			エジプト	1,276	170
			イスラエル	444	66
			レバノン	1,478	170
			モロッコ	99	13
			オマーン	232	38
			アラブ首長国	190	43
			その他アフリカ	3,813	429
合計	82,013	9,801	合計	73,614	10,307

注) 1) 焙煎されていないコーヒー豆

2) 輸入国のうちの「その他アジア」にインドネシア、ベトナムが含まれている。

出所) Singapore Trade Development Board, Singapore Trade Statistics, Dec. 1992, Vol. IV, No. 12.

ガポールドル（以下ではSドル）、輸出量は73,614トン（1億307万Sドル）である。輸入相手国を見れば、シンガポールがアジア産コーヒー豆の中継貿易港としての性格をもっていることを読み取れる。輸出相手国としては米国だけでなく、アジア、オセアニア、さらに欧州、中近東市場と合わせて多彩である。

2 シンガポールのコーヒー輸出業者

シンガポールコーヒー協会（Singapore Coffee Association）に加盟しているコーヒー輸出入業者は70社余りとされる。これにベトナムとのバーター貿易をやっている企業まで加えると業者の数はさらに増える。ただし、コーヒー貿易を主業務にしているシンガポール資本の会社は10社どまりだと見られている。いずれも華僑系の輸出業者である。

ヒヤリングを行なった2社を紹介しよう。

(1) ヒヤン・キエ社

代表的な大手業者であるヒヤン・キエ社（HIANG KIE, 集和貿易私人有限公司）は、1936年の創業で、資本金1,000万Sドル、常雇従業員80人である。これにコーヒー精製加工工場の日雇いが数百人加わる。コーヒー取引を主業とするが、こしょうや丁子など香辛料も取引している。コーヒーについては、カフェインレスコーヒー（生豆からカフェインを抜く加工）やグルメコーヒーの生産も行っている。コーヒー豆の輸入先は主にインドネシアであって80%をしめる。インドネシア産コーヒーはロブスタ、アラビカいずれも取り扱っている。その他ではタイ、ベトナム、それにわずかだがフィリピンもある。インドネシア産については品質は少しずつ良くなってきており、20年前に比べれば確実に良くなっていると見ている。

(2) ギエ・アスコム社

この輸出業者（GIE ASOCOM）は1920年代に父の叔父がスマトラのパレンバンでコーヒー取引を創業したことに始まり、1965年以前にはスマトラコーヒーをシンガポールで精製加工して、主に欧州（オランダ）や米国に輸出していたという。産地インドネシアをもととの拠点としてきたシンガポールの多くのコーヒー輸出業者の典型ともいえる会社である。

1992年には、倒産した会社の工場を買収し、別会社スンベラジャヤ社（PT. SUMBERAJAYA）を創業する方法で精製工場を1992年にスマトラのランボンで確保している。工場能力は25,000トン、常雇15人、収穫期日雇80人という。スンベラジャヤ社はインドネシアコーヒー輸出業者協会（AEKI）の会員企業である。

過去5年間の取扱実績は、25,000トンから35,000トンである。工場を設立する前は、インドネシアの輸出業者に加工を委託していた。コーヒー豆の買い入れは、インドネシア、タイ、ベトナム産であり、少量だがインドからも買っている。ベトナムについては、インフラおよび金融制度が未整備であること、輸出業者もまだ未経験であることなどの問題をもっているが、低賃金・低コストの有利さを持っていると見ている。タイは、インフラ整備も進んでおり、輸出業者も成熟していると評価している。

輸出先は欧州、米国、日本、マレーシア、韓国、オーストラリア、ニュージーランド、中近東である。アジア市場（オセアニアを含む）が60%を占める。かつての国際コーヒー協定非加盟輸入国（韓国、アフリカなど）は現在では競争がたいへん激しくなっており、輸出割合は10～20%に下

がっている。直接リスクを冒してまで売る必要はないということである。ちなみに北朝鮮には直接には売っていない。また韓国市場はだんだん成熟してきており、現在はKGFとネスルコリアの2社が輸入を独占しているという。89年7月以降の価格下落のもとで、薄いマージンで厳しい生き残りをかけて、隙間市場を狙い、従来のグレードに従うだけでなく、顧客の要望に合わせたサービスを展開するというのが、中継貿易港シンガポールの輸出業者の戦略と見られる。

おわりに

東南アジアのコーヒー輸出国として大きいインドネシア、タイ、ベトナムのなかから、インドネシアとベトナム、それに中継貿易港シンガポールの3カ国の加工輸出業者の動きを取り上げた。わが国へ輸入される東南アジア産コーヒーの多くは、総合商社がここに紹介したような輸出業者から輸入したものである。

小稿は、東南アジアの重要な輸出一次産品であるコーヒーの生産農民の経営発展と所得向上にとって、精製加工や輸出業務のありようはきわめて重大な意味をもっていることを明らかにする作業の中間報告である。

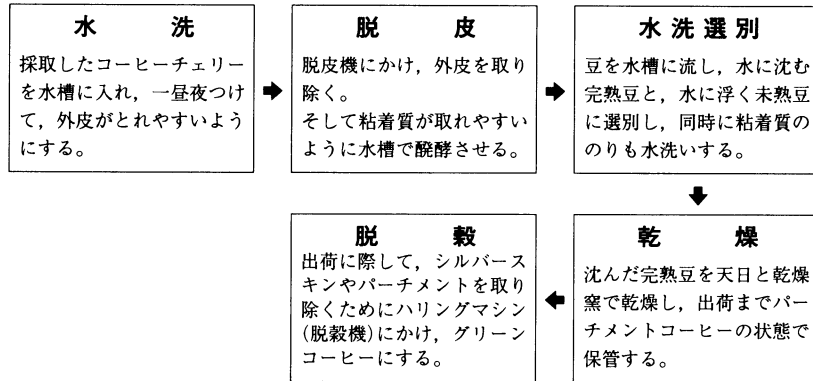
- 1) 東南アジアにおけるコーヒーの生産については、拙稿「国際コーヒー市場とインドネシア産地」（『金沢大学経済学部論集』第15巻第1号、1994年12月所収）を参照されたい。
- 2) 本稿のもとになった現地調査は、財団法人新農政研究所が1993、94年の2カ年にわたって実施した調査研究「南北問題におけるコーヒー豆の研究——日本の国際貢献策を求めて——」に参加して、1993年11月10日より12月5日の間に、シンガポール、インドネシア、ベトナムの3カ国において行なったものである。
- 3) 輸出されるコーヒー豆にはアラビカ種とロブスタ種の2種がある。これ以外にリベリア原産のリベリカ種があるが、生産量も少なく国際的にも取引はまれである。アラビカはエチオピア原産で世界生産量の70%以上を占める。コンゴ原産のロブスタ種は病害に強く、アラビカ種よりも低地で栽培が可能なことからアフリカや東南アジアで栽培が広がった。風味や香りはアラビカ種より劣るが、加工特性があるためにインスタントコーヒー原料としての需要がある。
- 4) アフリカのロブスタコーヒー生産国における減産については、例えばインドネシアに次ぐ世界第3位の生産国であるコートジボアールは1991年度（コーヒー年度であって10月から翌年9月まで）の生産量25.7万トンが翌92年度には14万トンに大幅な減産となった。『JETRO 農林水産 Weekly』No. 1958, 1994年11月8日参照。
- 5) 上野隆樹「コーヒーの歴史とアジアの生産流通」（『商品先物取引研究・南北貿易におけるコーヒー豆——日本の国際貢献策を求めて——・中間報告』、財団法人新農政研究所、1993年5月）参照。
- 6) 徳田明夫「コーヒー豆の流通について」（同上）。米倉 等「小農生産と市場構造——インドネシアにおけるコーヒー生産の事例——」（平島成望編『一次産品問題の新展開——情報化と需要変化への対応——』、アジア経済研究所、研究双書 No. 383, 1989年参照。
- 7) 参考までにコーヒー豆の加工選別工程を次ページに図示しておく。
- 8) 北部スマトラ地域のコーヒー産地で、ロブスタコーヒーの生産量が落ちているのは、価格の低落が管理不足や無施肥をもたらしている結果だろうという。アラビカの場合は品質はまだ維持しているが、ロブスタは品質も低下していると見られる。価格低落に対して、この北スマトラ・アチェの生産農民がスマトラ南部のコーヒートライアングルのロブスタ産地の農民より激しく反応しているのは、この

地域では小生産農民のコーヒー栽培規模がさらに小さく（平均規模は1 ha 以下であって、単収は600 kg / 1 ha）、他方でこの地域は混合農業が一般的であって野菜（ブロッコリー、トマト、キャベツ、コーンなど）、果実（ドリアン、マンゴスチン）、ジャガイモ（1～2月収穫の欧州向け）等の商品作物が豊富であって、価格変動に対して農民が経営の重点を激しく移す傾向が強いことによるものである。コーヒーノキの新植はストップしたものの生産量は落ちていない南部スマトラのロブスタ産地とは、混合農業のレベルが相当に異なっているのである。北スマトラのアラビカコーヒー産地である高原地帯が、歴史のある商品野菜産地（主にシンガポールやマレーシア向け）であることを見落せない。

- 9) 1993年半ばの国際価格水準は生産農民にとっても低すぎ、北スマトラの農民のコストからするとロブスタでは1 kg 当たり1ドル、アラビカでは2ドルは最低必要な水準だろうというのが、メダンの輸出業者の見方であった。
- 10) 矢島鈞次・窪田光純『ドイモイの国ベトナム』、同文館、1993年参照。Nguyen Xuan Oanh / Philip Donald Grub, Vietnam The New Investment Frontier In Southeast Asia, Times Academic Press, Singapore, 1992.

コーヒー豆の加工選別工程

- (1) ウォッシュド（水洗式コーヒー精製法）



- (2) アンウォッシュド（非水洗式コーヒー精製法）

